

展覧会

「京都工芸繊維大学歴代卒業設計優秀作品展」

デザイン・建築学系 准教授 角田 晁治

今秋、美術工芸資料館では、2018年11月12日(月)から12月6日(木)まで「京都工芸繊維大学歴代卒業設計優秀作品展」が開催されます。京都工芸繊維大学の建築教育の伝統は、実学としての堅実な建築家教育を基盤としつつ、柔軟で多様な思考の展開を目指したものです。京都高等工芸学校校案科にルーツを持ち、京都工業専門学校建築科(1944年～1949年)を経て、京都工芸繊維大学建築工芸学科(1949年～1977年)、建築学科(1977年～1988年)、住環境学科(1974年～1988年)、造形工芸学科(1988年～2006年)及び造形工学課程(2006年～2014年)を経て、現在のデザイン・建築学課程(2014年)へと、設計教育を基盤とする教育思想は連綿と受け継がれてきました。本展は、そこで学んだ各年代の先達たちが制作した卒業設計の優秀作品を紹介する初めての展覧会です。学生時代の集大成としての卒業設計は、個々の学生がその持てる全てを出し切る、建築学生としての最大のイベントであり、同時に建築家としてのキャリアにおけるマルチロールでもあります。従って、各大学の卒業設計作品には、その大学の教育の方向性が映し出されるものであり、それは本学においても同様です。本学建築教育においては、創立当初から少人数のアトリエ制によるデザイン教育を柱としてきましたが、展示図面からもその教育思想が感じ取れます。時代の変化とともに建築教育の在り様も変わっていきませんが、その出自を認識することで新たな次の一歩を見つけるという視点からも、本展覧会の重要性が認識できます。

登録していきたい、という意向をもって保管されており、筆者もその実現を心待ちにしているところでです。また本学建築系学科では、卒業設計賞として1975年より制定された「松ヶ崎建築会賞」が毎年の優秀作品(設計・論文とも)に贈られています。その伝統は現在においても継続しており、収蔵されている近年の図面はその多くがこの賞を受賞した作品であります。収蔵されている作品は、そのデザインや表現において、いずれも時代の空気を纏ったものであり、モダニズム全盛のころからポストモダニズムの動きを経て、多様な形態とコンセプトが乱立する現在の状況まで、どの作品も学生らしい若々しい感性とエネルギーを感じさせるものです。またその反面、初期のものにおいては学生らしからぬ成熟度を感じさせるものも多数見られ、本学の建築教育の真髄を見る思いがします。1950年代、60年代の建築工芸学科の作品においては、そのほとんどが時代を反映したモダニズム建築ですが、この頃の図面からは、ひたすら美しい線を手で引くことへの執着と図面への愛着を感じずにはいられません。当然のことながら、当時はすべての表現は手描きにより行われていました。またロットリングなどの製図ペンは未だ登場しておらず、烏口を用いてのインキングでした。これらの道具を巧みに用いて、精緻で張りのある線を積み重ねた迫力のあるドローイングが制作されました。とりわけ、全紙サイズの用紙全面に描かれた詳細図においては、いずれの作品もそのリアリティと表現の巧みさにおいて、これが学生作品であることを疑わせる完成度があり、当時の本学の建築教育の質の高さと、学生の強い気概を感じ取ることができます。また、この時代の作品でもつつ特筆すべきは、手描きの透視図です。建築設計は三次元の空間造形ですが、それを表現した透視図は、ただ説明的に描かれたものではなく、一枚の絵画としても見ることでできるレベルにあるものも多く見られ、当時の学生が絵心に溢れていたこと

も推察されます。その後、1974年からは住環境学科が創設され、1977年には建築工芸学科は建築学科に改称されましたが、当時より両学科の間では、図面表現において互いに異なる指向性がありました。建築学科においては従来からの流れを汲み、全紙サイズのケント紙を用いること、それには枠取りを施すことなどの暗黙の決まりがあったのに対して、住環境学科ではより自由で多様な素材と表現が認められていました。当時に学生時代を過ごした筆者の記憶を辿りますと、建築学科においては大きな面を線で埋める場合、全ての線を手で描くことや、図面内に書き込む文字は、当時全盛であったハインスタントレタリング^①などを用いず、図面表現と同調する、いわゆる「製図文字」を書くこと、などが暗黙のルールであったように記憶します。その後、建築系の両学科と意匠学科が融合して造形工学課程となつて以降は、図面表現もさらに多様なものへと変化していきました。現在、建築の設計及び建設の現場では、他の分野と同様にコンピュータ無しにはものごとが進まないと言つても過言ではない状況にあります。二次元、三次元の図面表現を行うCADやCGから、すべての建築プロセスを貫して取り扱うBIM(Building Information Modeling)へと、その環境は大きく様変わりしており、同時に建築図面が持つ意味や価値、その制作のスピードも変化しています。コンピュータを用いた表現が当たり前となり、その可能性がさらに多様化する現代にあつて、今回美術工芸資料館において本展覧会が催されることは、現役学生諸君にとっても様々な図面表現が存在することを知るとともに、図面という媒体につき込まれた作者の強い思いとスキルを感じてもらふことが出来る機会として、極めて重要であると思います。単に「昔の図面」として作品を見ることがではなく、そこに潜む新たな表現の可能性と、自らの身体性に根差して制作することの意味、そしてそれへの作者の執念などを感じて、さらに思考を深めてもらえれば幸いです。



図1
上 (国民休暇村宿舍計画案7) (詳細図)
下 (国民休暇村宿舍計画案9) (外観透視図)
建築工芸学科1964年卒 西村征一郎名誉教授



図2
上 (八郎湯干拓地総合中心地センター計画案13) (詳細図)
下 (八郎湯干拓地総合中心地センター計画案15) (外観透視図)
建築工芸学科1967年卒 船越暉由名誉教授